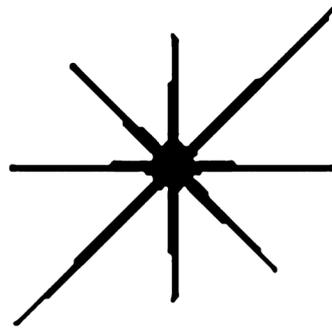


# コメット通信 39

[23年10月号特別付録2]



*comet book club*

éds. de la rose des vents - suiseisha

## 「暗黒」巡り

泥沼にて、竹筒をかざし、遠望する

桑原喜一

「暗黒時代」という名称は

西欧〈中世〉からは ほぼ 退けられて、

未開の 奥地へと

探検の 一歩一歩を 辿り

歳月を 要しても

「暗黒大陸」は、

人の身の丈を遥かに凌ぐ

訳ではなかった、らしい。

それ故だろうか、

植民地化を経て

地図上の境界

乱立する部族の

国の 境の 一部は

地勢的には あり得ない

直線で 確定され、

「暗黒」は

政情不穏と遺恨の衣をまとう

亡霊となった。

その前か 後か、

暗黒街

暗黒小説

暗黒舞踏。

薄まっては

暗黒面 として生き残り、

やがて人知の視界は

はるかに精度を増して

「暗黒星雲」を捉え始めた。

そして 今や

「すばる望遠鏡」なる装置で

〈見たたり触ったりできない〉という、  
「暗黒物質」を視野に入れ  
「暗黒エネルギー」も補足しよう、  
としているらしい。

身近といえ、身近  
海にも 空にも  
増え続ける浮遊物。

直に見ることは ほぼ 無理にしても  
想像することは 可能な「暗黒」。

探査艇 しんかい6550 の  
撮影する 画像の

ライトの届かぬ先の「暗黒」。  
一瞬にして爆縮する

周遊潜水艇 タイタンの乗員  
二十一世紀の富豪 の

予感したかも知れない「暗黒」。  
身近も 身近、

眼球 の  
あたり

目を 瞑れば、  
星空は 即 暗黒。

満月 の  
残像は しばし

脳内に、  
ほぼ 暗黒。

日輪 に 顔を向ければ  
目蓋の

赤い  
闇。

見上げる星の 手前  
超高速周回する、

通信・気象・監視・軍事  
各種 現役の

衛星 と その残骸、

ほとんどが 目には見えない  
スペースデブリに満ちた  
空の「暗黒」。

今 ここ、

この身の拠って立つ

地表にあって

遠からず

この陸地の

あちこちは 暗雲に覆われ、

この地表こそが「暗黒」そのものに

変じようとしている 事態を

目前にしている のだろうか、

他ならぬ 人知の

探査

計測と計算 の

データ処理、

その 数値化の果てに手にした

一連の〈技術〉によって、

その

恩恵と災厄を。

暗黒は

暗く、

黒い、

ばかりとは 限らない。

悪夢に 希望を 塗され

期待に 溺れ、

光輝の濡れ衣をまとってもある。

旧時代めく言い回しだが

その暗黒への〈導火線〉に

もはや、

思わぬところで

眼には 見えない

炎と煙が 勢いよく

立ち昇ろうとしている、のだろうか。

「暗黒物質」や「暗黒エネルギー」の

探索は 叶わぬままに、

あちらでも こちらでも

炸裂するヒカリの連鎖、

白い

闇。

今こそは、

ヒトが 最終的に直面するであろう

〈滅亡〉のリハーサルとしての

「暗黒時代」の幕開けなのか。

核の 傘。

私、という鏡の片隅に

キノコ雲。

〈言葉〉は 人を導くにしても、

人が導かれる その先は

一様ではない。

「上に立つ」という

自認の 肥大化

(実のところ、

その場凌ぎの 矮小化)は、

「総合的、俯瞰的」

「丁寧な説明(を丁寧に説明する)」だけの

頼りない 衣裳をまといつつ、

薄められた 隠蔽の

姑息な 言い回しの

常套句へと 受け継がれ、

ある種の遺伝子は

往々にして

色濃く 呼応し

取り憑かれもして、

ある種の 人は

そこに

安住する。  
葬った、はずの  
乗り越えてきた、はずの  
黒い影は、  
色濃く 蠢き  
遺灰から  
姿を現わす 文字は、  
幽かに 薄笑いを 浮かべている。  
お呪いなのか  
お祝いなのか  
背後霊の名は、「安国上意下達誇示」。  
鎮座する 墓碑銘には、  
「由らしむべし、知らしむべからず」。  
「政治・●●・経済」の  
暗黒面は いつの時代にも  
見え隠れしてはいるが、  
それら 三つの 語頭に  
「暗黒」が顔を出す その時、  
ヒトの棲む 地表の  
ほとんどは 暗黒と化するのだろうか。  
後々 数百年後か  
さらに 後か  
それとも 数年後か、  
カタカナ・漢字・ひらがな圏の  
人類の一部が どこかで  
生き延びるとして、  
一文字入れ換えて  
「闇黒時代」と呼び慣らす  
日々を、  
迎えるのだろうか。

核の 傘、  
ワタシ、という鏡の破片に  
キノコ雲。

黒竹を伐り

管を通して覗き見する 先の、

(雲はその姿形を

変えているだろう、が)

そんな事態 は

起こらないだろう、たぶん。

けれども、

この〈たぶん〉も怪しい、たぶん。

多分に、たぶん。

たぶんに、他聞。

タブンという

猛毒の、

一九三六年

独逸に於いて

「発明」「開発」された

神経ガスもある、らしい。

これらも

コトのハのデブリ、たぶん。

それゆえ か、

それなのに か、

私の〈畏れ〉の感覚は

〈戯れ〉に流れ

日増しに

摩耗してゆく、ばかり。

それでも、なお

刻んでおこう、

日々

言葉の中に 言葉を。

核の 傘

わたし という 鏡

キノコ雲

執筆者について——  
桑原喜一（くわばらきいち）

一九四九年生まれ。小社刊行の詩集には、『散文』がある。